

10月24日 創世記2章4~25節 今日の説教から

説教題：「もう一つの天地創造」

私たちの主であるイエス様は、どうして生まれなければいけなかつたのでしょうか。この疑問には、きわめて簡潔な答えが存在します。それは、「私たち人間が罪深い存在だから」という、何とも悲しい事実です。イエス様は、私たちの罪を贖うためにこの世に遣わされました。それは、罪によって神様から離れてしまう私たち人間が、それでも救いに導かれるように、と神様がこの世のすべてを愛してくれた結果のことです。その私たちの罪、キリスト教で「原罪」と呼ばれるものが今日の聖書箇所である創世記に記されています。人間には生まれながらの罪がある。しかし、それを取り除くために、イエス様はこの世に生まれたのです。

今日の箇所では同じ創世記1章に記されている天地創造とは違った側面からこの世界の創造が記されています。1章ではそれぞれ混沌から世界が形作られて、やがて植物や動物が作り出されて、最終的に人間が作られる様子が記してあります。一方で今日の箇所では、まず人間の創造がすべての前提にあり、その周りで植物や動物が作り上げられています。特に動物については1章と順序が違い、そして何よりその存在意義として「人間の助け手になるため」という目的によって作り出されたと記されています。

神様は、動物を人間の助け手であると共に、「孤独をいやすもの」として創造しました。しかし、動物だけではそれが叶わず、人間のあばら骨を使ってもう一人の人間、アダムに対するイブを作りました。それが天地創造における人間の始まりです。

しかし、人間は神様の言いつけを守ることができず、蛇にそそのかされて知恵の木の実を口にしてしまいます。神様の命令を中心にして生きることができます、「おいしそうである」「賢くなれそうである」という自分の欲望を中心にして生きてしまうのです。これこそが、原罪と呼ばれる人間の罪の根源なのです。

だからこそ、イエス様が生まれる「必要」がありました。私たち人間は、一人では「自分中心」という大きな罪から逃れることができませんでした。神様の言葉があっても、それを解き明かすことができる人がいても、神様のその御心をすべて理解することは出来ず、そして自分を中心とした欲望にはあらがうことができませんでした。動物が助け手となっても、男女が手を取り合っても、それだけでは神様の御心を実現することは出来ませんでした。だからこそ、神様はイエス様を私たちのもとに遣わしてくれたのです。

私たちは、自分がなぜ生まれたのかを知ることは出来ません。しかし、私たちは今与えられているこの命を「どう使うか」を真剣に考える事ができます。天地創造において神様が「善いものだ」と断言したこの世界の中で、神様が「善いものだ」と断言した私たち人間は、この世界をますます良い場所にするためにこの人生を使うことができるのではないかでしょうか。私たちにはそれだけの力が与えられていて、そしてその背中を神様が支えてくれているのです。そして何より、イエス様が私たちの罪を贖ってくれたからこそ、私たちもこの世界を良いものにするための「善い業」を共に担う事が出来るのです。イエス様の誕生によって、十字架の贖いによって、私たちは神様に強められて信仰を歩むことができます。その喜びを胸に、今週一週間の、これから歩みを共に進めましょう。

今日の説教箇所：創世記 2 章 4～25 節

- 4:主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかつたからである。また土を耕す人もいなかつた。しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となつた。
- 8:主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えさせて、また園の中央には、命の木と善惡の知識の木を生えさせてされた。エデンから一つの川が流れ出していた。園を潤し、そこで分かれて、四つの川となつていた。第一の川の名はピションで、金を産出するハビラ地方全域を巡っていた。その金は良質であり、そこではまた、琥珀の類やラピス・ラズリも産出した。第二の川の名はギホンで、クシュ地方全域を巡っていた。第三の川の名はチグリスで、アシュルの東の方を流れしており、第四の川はユーフラテスであった。主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べてなさい。ただし、善惡の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」
- 18:主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持つて来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となつた。
- 20:人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかつた。主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかつた。